

平成29年度 宜野湾市平和学習派遣事業

派遣報告書

平成29年8月8日～8月10日
長崎県長崎市



沖縄県宜野湾市

市長あいさつ



宜野湾市長 佐喜眞 淳

平和学習派遣事業は平和行政の推進を目的に、平成17年度より開始され、今年度で12回目の実施となりました。市内各小中学校から選出された児童生徒を被爆地長崎へこれまでに述べ96名を派遣し、毎年8月9日に行われる「平和祈念式典」及びその前日より2日間に渡り開催される「青少年ピースフォーラム」に参加し、全国の青少年と共に、戦争の愚かさ、悲惨さ、平和の大切さを学んでおります。

先の大戦で経験した、沖縄での地上戦や広島・長崎を一瞬にして廃墟と化した原子爆弾投下。このような惨劇が二度とこの地球上で繰り返されることのないよう、過去の歴史をしっかりと若い世代へ伝えていく、そしてその中で平和の大切さを改めて実感させ、「戦争も核兵器もない、平和で希望ある世界」を目指す、という本事業の役割は戦後72年が経過した今日、ますます重要となっております。

唯一の被爆国として、日本が、核兵器廃絶の実現に向け、国際社会において主導的役割を果たすことを期待いたします。

本市におきましても、昭和60年に反核・軍縮平和都市宣言を行い、平和市長会議と連携し、核兵器の非人道性を訴え、全世界に向けて核兵器廃絶を求め続けております。

現在、日本国土のわずか0.6%の小さな島沖縄に、在日米軍施設の約74%が存在しております。市域の約30%が米軍基地に占められ、なかでも市の真ん中に居座る普天間基地は市域の約25%を占め、ドーナツ状の街を形作っております。この特異な地形は、市の発展を大きく阻み、そして何より市民の生命・財産を脅かし続けております。さらに、2012年からは、普天間飛行場へMV-22オスプレイが強硬配備されたことにより、市民の基地負担はもはや限界に達していると言わざるを得ません。ついては、関係機関と連携し、普天間飛行場の一日も早い閉鎖・返還に向け取り組んでまいります。

さて、今年には戦後72年になります。年々戦争体験者が減少していることに伴い、戦争の悲惨さ、平和の大切さを語り継いでいくことが困難となりつつあります。しかしながら、今を生きる私たちは、次の世代へと戦争の悲惨さ、平和の大切さを継承していく義務があります。派遣生徒の皆様には、今回の平和学習を通して、命がいかに尊くかけがえのないものなのかを学び、これからも平和を強く意識し成長されることを願います。

本市といたしましても、沖縄戦及び原子爆弾によりお亡くなりになられた人々を追悼し、再び悲惨な戦争が起こらないよう、平和事業をとおして平和の大切さ、命の尊さを次の世代へと語り継いでまいります。

最後に、この事業にご参加いただきました生徒やその保護者の方々へ、本事業への多大なるご理解ご協力に対して御礼を申し上げますとともに、市民の皆様には平和な社会の創造に大きく貢献していただき、近い将来「戦争も核兵器もない、平和で希望のある世界」が実現されることを祈念いたします。

実施概要

1. 背景と目的

戦後 72 年が経過し、かつて沖縄戦において悲惨な体験をした世代が減少している今日、戦争を知らない世代が平和について学ぶ機会を作ることは、本市の平和行政を推進する観点から大変重要なことです。

特に本市においては、沖縄戦当時嘉数地区に日本軍の前哨基地があったことから、市内で激しい戦闘が繰り広げられ、多数の住民が犠牲になりました。

この過去の事実をしっかりと捉え、戦争を知らない世代に正しく継承していくことは私たちの責務です。

本市では市内生徒（中学生）を対象に、沖縄戦を学びながら、去る大戦での被爆地長崎を訪問する「宜野湾市平和学習派遣事業」を実施しております。

毎年 8 月 9 日に開催される「平和祈念式典」及び「青少年ピースフォーラム」へ参加し、全国の青少年と交流をする中から命の尊さや平和の大切さを学ぶことによりこれからの平和な社会を築くことを目的とします。

2. 実施経過

- 平成 29 年 4 月 17 日
宜野湾市長より宜野湾市教育委員会へ事業協力依頼
市内各中学校校長へ派遣生徒の推薦依頼
- 平成 29 年 7 月 14 日
派遣生徒・保護者を対象に事業説明会
- 平成 29 年 7 月 26 日
派遣生徒を対象に事前学習会
- 平成 29 年 8 月 8 日～10 日
長崎市で平和学習実施
- 平成 29 年 9 月 1 日
市長・教育長・保護者及び学校関係者へ学習報告会




 団員名簿（平成29年度宜野湾市平和学習派遣事業）


学 校 名	氏 名	学 年
普天間中学校	仲村 琉希	2年
普天間中学校	桃原 嬉	2年
真志喜中学校	玉城 珠里	1年
真志喜中学校	入米藏 結	1年
嘉数中学校	佐久田 彪雅	1年
嘉数中学校	濱川 明珠	1年
宜野湾中学校	池宮城 樹一郎	1年
宜野湾中学校	屋良 明佳里	1年
真志喜中学校 教諭	入江 達弥	引率
宜野湾市役所 市民協働推進課	生田 智也	事務局

事前学習

長崎への派遣に先立ち、第2次世界大戦における唯一の地上戦である沖縄戦について学ぶため、宜野湾市立博物館・嘉数高台公園・チンガーガマ等で学習を行いました。

期 日：平成29年7月26日（水）10:15～17:00

場 所：宜野湾市立博物館・チチフチャーガマ・嘉数高台・チンガーガマ・旧野嵩収容所跡

宜野湾市立博物館を見学し、学芸員から戦前、戦時中の宜野湾市について説明してもらいました。



戦時中、チチフチャーガマに避難していた住民の様子を学びました。

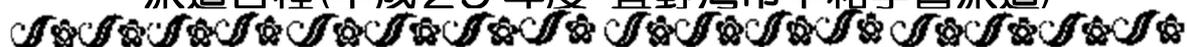
沖縄戦で激戦地となった嘉数高台公園にて戦跡の見学を行いました。また、展望台より普天間飛行場を眺めながら、戦中・戦後の普天間飛行場について学習しました。



チンガーガマ（井戸）に避難していた住民の様子を学びました。

野嵩収容所周辺を歩き、捕虜となった住民がどのような生活をしていたかを学びました。




派遣日程(平成29年度 宜野湾市平和学習派遣)


日付	時間	日	程
第1日目 8月8日 (火)	6:15	那覇空港国内線3階集合	
	7:10	那覇発 ANA1200便にて福岡へ	
	8:45	福岡空港着 貸切りバスにて長崎へ(所要時間/約2時間30分)	
	12:00	園田真珠にて昼食(飲茶料理)	
	13:00	ピースフォーラム参加受付(平和会館ホール)	
	13:30	開会行事(被ばく体験講和など)	
	15:10	班別交流会(15:10~17:20) 青少年ピースフォーラム(Aコース)	
	18:00	夕食交流会(長崎新聞文化ホール)	
	19:30	交流会終了後、ホテルへ	
	20:00	ホテル着	
第2日目 8月9日 (水)	7:00	ホテルにて朝食	
	8:00	路面電車にて長崎平和公園へ移動	
	10:35	「原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」	
	12:00	和泉屋にて昼食(中華セット)	
	13:30	青少年ピースフォーラム(Aコース)	
	15:45	◎原爆資料館見学 見学後、市内レストランにて夕食	
	19:00	ホテル着	
第3日目 8月10日 (木)	7:00	ホテルにて朝食	
	8:00	専用バスにて移動(所要時間/約2時間30分)	
	10:30	◎九州国立博物館	
	11:40	太宰府天満宮 見学 太宰府天満宮本殿裏「照星館」にて昼食(合格御膳)	
	13:00	太宰府天満宮 見学	
	13:30	福岡空港着 ⇒ 搭乗手続き	
	15:00	福岡発 ANA1209便にて沖縄へ	
	16:45	那覇空港着	

※ 台風5号接近の為、出発が1日遅れ8日(火)となった。それにともない、7日及び8日の午前中に行う予定であった平和学習が出来なかった。


青少年ピースフォーラム


平成29年度 青少年ピースフォーラム

期日：平成29年8月8日(火)～9日(水)

主催：長崎市

8月9日の平和祈念式典にあわせて、全国の自治体が派遣する平和使節団約500人の青少年のみなさんと、長崎の青少年ピースボランティアの皆さんと一緒に、被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的として実施しています。

このフォーラムには、長崎市青少年ピースボランティアの高校生や大学生も参加し、平和学習の進行やフィールドワークの案内などを行っています。

宜野湾市は、平和学習Aコースに参加しました。

■ プログラム

日	時	内 容 <場 所>	
1日目 8/8 (火)	14:00 ～15:10	1) 開会行事(被爆体験講話など) <平和会館ホール>	
	15:20 ～17:20	【コース別の平和学習】長崎原爆の実相について学びます。	
		<<Aコース>> 2) 平和学習<平和会館ホール> こじんまりフィールドワーク (屋外) <原爆資料館周辺>	<<Bコース>> 2) 被爆建造物等の フィールドワーク (屋外) <原爆資料館周辺>
18:00 ～19:30	3) 交 流 会 (希望者) <長崎新聞文化ホール>		
2日目 8/9 (水)	午前	4) 原爆犠牲者慰霊平和祈念式典への参列<平和公園ほか> もしくは、4) 長崎市立中学校での平和集会への参加	
	13:30 ～15:30	【コース別の平和学習】平和について考えます。	
		<<Aコース>> 5) 平和学習 <平和会館ホール>	<<Bコース>> 5) 平和学習 <長崎ブリックホール国際会議場>

青少年ピースフォーラム Aコース1日目



■ 被爆体験講話

講師 深堀 讓治さん（被爆当時 14 歳）

1945年8月9日、原爆が投下されたとき母と中学1年、少学5年の弟2人、それに5歳の妹の4人が、爆心地から約600mのところ
で被爆し亡くなりました。国の指導者の一方的なリードで一般国民は大切なことを知らされないまま、戦争に参加し敗戦へと導かれ、大きな犠牲を強いられました。国民は、常に国が暴走しないように、監視を続ける努力が必要です。
（公益財団法人長崎平和推進協会ホームページより）

○グループ学習

ピースボランティア（学生）の進行のもと、宜野湾市のメンバーと別れ、全国から集まった生徒とグループになりました。レクレーションを交えた自己紹介の後、核兵器の実相、長崎市の平和に関する取組の紹介や、紙芝居「嘉代子桜」上演、野外でのフィールドワークも行われ、原爆の悲惨さと平和の大切さについて学びました。



▲自己紹介



▲長崎方言かるた



▲ふりそでの少女像



▲紙芝居「嘉代子桜」



▲原爆殉難教え子と教師の像



▲フィールドワーク

夕食交流会

長崎市が主催するフォーラム参加団体が集う夕食交流会へ参加しました。全国から集まった青少年と交流を図ることができました。



青少年ピースフォーラム Aコース2日目

2日目は、長崎に投下された原爆やその時の被害状況等について学んだ後に、グループごとに分かれ、「平和じゃないときはどんな時」について議論し、その内容を各グループで発表を行いました。



▲グループで話し合い



▲自分の意見を書きだし



▲グループの意見をまとめている様子



▲グループ内での発表



▲みなのお意見を貼った地球儀が完成



▲Aコース参加者全員と集合写真

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典 参列（8月9日）



▲平和祈念像



▲前の席に参列



▲会場に向かう道



▲式典会場前にて

長崎市の平和公園で開催された、「被爆 72 周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」に参列しました。長崎で原子爆弾がさく裂した 8 月 9 日午前 11 時 2 分に、原爆犠牲者への慰霊のため黙とうを行いました。そして、長崎平和宣言、平和への誓い、被爆者合唱等が行われ、核兵器の廃絶と恒久平和の実現に向け、平和の輪を世界中に広げていくことを誓いました。

長崎原爆資料館見学（8月9日）

原爆資料館では、爆風で破壊された建物、熱線によって溶かされた皮膚、放射線による病気など、一発の原爆によって一瞬にして変わってしまった長崎の街や人々の被爆の状況について、また、今なお存在する核兵器とその脅威について学びました。



▲原爆の時刻で止まった柱時計



▲原爆投下時のCG



▲原爆被害のパネル展

長崎平和宣言

「ノーモア ヒバクシャ」

この言葉は、未来に向けて、世界中の誰も、永久に、核兵器による惨禍を体験することがないように、という被爆者の心からの願いを表したものです。その願いが、この夏、世界の多くの国々を動かし、一つの条約を生み出しました。

核兵器を、使うことはもちろん、持つことも、配備することも禁止した「核兵器禁止条約」が、国連加盟国の6割を超える122か国の賛成で採択されたのです。それは、被爆者が長年積み重ねてきた努力がようやく形になった瞬間でした。

私たちは「ヒバクシャ」の苦しみや努力にも言及したこの条約を「ヒロシマ・ナガサキ条約」と呼びたいと思います。そして、核兵器禁止条約を推進する国々や国連、NGOなどの、人道に反するものを世界からなくそうとする強い意志と勇気ある行動に深く感謝します。

しかし、これはゴールではありません。今も世界には、15,000発近くの核兵器があります。核兵器を巡る国際情勢は緊張感を増しており、遠くない未来に核兵器が使われるのではないかと、という強い不安が広がっています。しかも、核兵器を持つ国々は、この条約に反対しており、私たちが目指す「核兵器のない世界」にたどり着く道筋はまだ見えていません。ようやく生まれたこの条約をいかに活かし、歩みを進めることができるかが、今、人類に問われています。

核兵器を持つ国々と核の傘の下にいる国々に訴えます。

安全保障上、核兵器が必要だと言い続ける限り、核の脅威はなくなりません。核兵器によって国を守ろうとする政策を見直してください。核不拡散条約（NPT）は、すべての加盟国に核軍縮の義務を課しているはずで、その義務を果たしてください。世界が勇気ある決断を待っています。

日本政府に訴えます。

核兵器のない世界を目指してリーダーシップをとり、核兵器を持つ国々と持たない国々の橋渡し役を務めると明言しているにも関わらず、核兵器禁止条約の交渉会議にさえ参加しない姿勢を、被爆地は到底理解できません。唯一の戦争被爆国として、核兵器禁止条約への一日も早い参加を目指し、核の傘に依存する政策の見直しを進めてください。日本の参加を国際社会は待っています。

また、二度と戦争をしてはならないと固く決意した日本国憲法の平和の理念と非核三原則の厳守を世界に発信し、核兵器のない世界に向けて前進する具体的方策の一つとして、今こそ「北東アジア非核兵器地帯」構想の検討を求めます。

私たちは決して忘れません。1945年8月9日午前11時2分、今、私たちがいるこの丘の上空で原子爆弾がさく裂し、15万人もの人々が死傷した事実を。

あの日、原爆の凄まじい熱線と爆風によって、長崎の街は一面の焼野原となりました。皮心が垂れ下がりがながらも、家族を探し、さ迷い歩く人々。黒焦げの子どもの傍らで、茫然と

立ちすくむ母親。街のあちこちに地獄のような光景がありました。十分な治療も受けられずに、多くの人々が死んでいきました。そして72年経った今でも、放射線の障害が被爆者の体をむしばみ続けています。原爆は、いつも側にいた大切な家族や友だちの命を無差別に奪い去っただけでなく、生き残った人たちのその後の人生をも無惨に狂わせたのです。

世界各国のリーダーの皆さん。被爆地を訪れてください。

遠い原子雲の上からの視点ではなく、原子雲の下で何が起きたのか、原爆が人間の尊厳をどれほど残酷に踏みじったのか、あなたの目で見て、耳で聴いて、心で感じてください。もし自分の家族がそこにいたら、とを考えてみてください。

人はあまりにもつらく苦しい体験をしたとき、その記憶を封印し、語ろうとはしません。語るためには思い出さなければならないからです。それでも被爆者が、心と体の痛みを耐えながら体験を語ってくれるのは、人類の一員として、私たちの未来を守るために、懸命に伝えようと決意しているからです。

世界中のすべての人に呼びかけます。最も怖いのは無関心なこと、そして忘れていくことです。戦争体験者や被爆者からの平和のバトンを途切れさせることなく未来へつないでいきましょう。

今、長崎では平和首長会議の総会が開かれています。世界の7,400の都市が参加するこのネットワークには、戦争や内戦などつらい記憶を持つまちの代表も大勢参加しています。被爆者が私たちに示してくれたように、小さなまちの平和を願う思いも、力を合わせれば、そしてあきらめなければ、世界を動かす力になることを、ここ長崎から、平和首長会議の仲間たちとともに世界に発信します。そして、被爆者が声をからして訴え続けてきた「長崎を最後の被爆地に」という言葉が、人類共通の願いであり、意志であることを示します。

被爆者の平均年齢は81歳を超えました。「被爆者がいる時代」の終わりが近づいています。日本政府には、被爆者のさらなる援護の充実と、被爆体験者の救済を求めます。

福島原発事故から6年が経ちました。長崎は放射能の脅威を経験したまちとして、福島の被災者に寄り添い、応援します。

原子爆弾で亡くなられた方々に心から追悼の意を捧げ、私たち長崎市民は、核兵器のない世界を願う世界の人々と連携して、核兵器廃絶と恒久平和の実現に力を尽くし続けることをここに宣言します。

2017年（平成29年）8月9日

長崎市長 田上富久

平和への誓い

原爆が投下された 1945 年 8 月 9 日、私は 16 歳。爆心地から 3.6 キロ離れた長崎県疎開事務所に学徒動員されていました。11 時 2 分、白い閃光と爆発音を感じ慌てて机の下にもぐり込みました。夕方、帰宅命令が出て、私は学友と 2 人金毘羅山を越えて帰ろうと山の中腹まで来たところ、山上から逃げてくる多くのけが人に「山の向こうは一面火の海だから…」と制止され、翌朝、電車の線路に沿って歩き始めました。長崎駅の駅舎は焼け落ち、見慣れた街並みは消えてなくなり、別世界に迷い込んだようでした。ようやく辿りついた山王神社近くの親せきの家は倒壊していました。その中で家の梁を右腕に抱きかかえるような姿で 18 歳の姉は息絶えていました。あの時、私が無理をしてでも家に帰っていれば、せめて最後に声をかけられたのではないかと、今でも悔やまれてなりません。そのあと大学病院へ向かい、さらに丘を越えると眼下に浦上天主堂が炎上していました。涙があふれ出るとともに怒りを覚え、「ああ、世界が終わる」と思いました。ここ平和公園の横を流れる川には折り重なって死体が浮いていました。私は、三ツ山に疎開していた両親に姉の死を報告し、8 月 12 日、母と弟と 3 人で材木を井桁に組み、姉の遺体を茶毘に付しました。その日は晴天でした。頭上から真夏の太陽が照りつけ、顔の正面からは熱気と臭気がせまり目がくらみそうでした。母は少し離れた場所で地面を見つめたまま、ただ祈り続けていました。

たった一発の原子爆弾は 7 万 4 千人の尊い命を奪い、7 万 5 千人を傷つけました。あの日、爆心地周辺から運よく逃げ延びた人々の中には、助かった喜びも束の間、得体のしれない病魔に襲われ多くが帰らぬ人となりました。なんと恐ろしいことでしょうか。私は「核は人類と共存できない」と確信しています。2011 年 3 月、福島第一原子力発電所の事故が発生し国内の原発は一斉に停止され、核の脅威に怯えました。しかし、リスクの巨大さに喘いでいる最中、こともあろうに次々と原発が再稼働しています。地震多発国のわが国にあって如何なる厳しい規制基準も「地震の前では無力」です。原発偏重のエネルギー政策はもっと自然エネルギーに軸足を移すべきではないでしょうか。戦後「平和憲法」を国是として復興したわが国が、アジアの国々をはじめ世界各国から集めた尊敬と信頼は決して失ってはなりません。また、唯一の戦争被爆国として果たすべき責務も忘れてはなりません。

私は 1979 年、原爆で生き残った有志 6 人で原爆写真の収集を始め、これまでに様々な人たちが撮影した 4 千枚を超える写真を収集検証してきました。原子雲の下で起きた真実を伝える写真の力を信じ、これからも被爆の実相を伝え、世界の恒久平和と核廃絶のために微力をつくすことを亡くなられた御霊の前に誓います。

2017 年（平成 29 年）8 月 9 日

被爆者代表 **深 堀 好 敏**

その他 資料

9/1 被爆地・長崎での平和学習を報告

市報ぎのわん(平成 29 年 12 月号)

市では、平和の尊さを学び平和思想に対する啓発を高めるために、市内各中学校の生徒を被爆地長崎市へ派遣しています。事前学習として、市博物館や市内戦跡を巡り、沖縄戦や戦争時の宜野湾について学びました。長崎では、青少年ピースフォーラムへ参加し、「平和でないときはどんなとき？」をテーマに、積極的に意見を交わしました。また、平和祈念式典へも参列し、原爆被害者の冥福と世界恒久平和を祈りました。



『派遣生徒の感想』

- ・私達が安心して暮らせる平和な世界になってほしいと心から思えるようになりました。
普天間中学校 2年 仲村 琉希
- ・未来が平和であるために、私ができることを、精一杯がんばります。
普天間中学校 2年 桃原 嬉
- ・平和で核兵器のない未来のために今私達ができることはなにかを考えさせられました。
真喜志中学校 1年 玉城 珠里
- ・体験者でなくても、戦争のことを伝え続けることはとても大切だと思いました。
真喜志中学校 1年 入米蔵 結
- ・これからはもっと平和のことを考えていきたいです。
嘉数中学校 1年 佐久田 彪雅
- ・今回学んだ事を活かし、次の世代に繋げ、世界中で笑顔がふえるように頑張ります。
嘉数中 1年 濱川 明珠
- ・平和の大切さや命の尊さを発信していきたいと思います。
宜野湾中 1年 池宮城 樹一郎
- ・平和を守るために自分ができそうなことを頑張っていきたいと思います。
宜野湾中 1年 屋良 明佳里



平和パネル展開催
生徒の学習の成果等を展示します。是非、ご覧ください。
日時 12月18日～22日
場所 市役所1階ロビー

10/3 平和について考える 市内各中学校でお笑い芸人が平和劇



市内の各中学校で、沖縄のお笑い芸人ゆうりきやーさんらによる平和劇やトークディスカッションが行われました。平和劇は、喜劇を楽しみながら、戦争・平和への情緒をみんなで共感できる作品でした。トークディスカッションでは、平和学習派遣生徒の事前学習の様子を紹介し、地元の歴史を話しやすい話題で共有し、身近に平和と戦争が感じられるものでした。

11/12 in サンエー宜野湾コンベンションシティ ピースフォーラムぎのわん開催



平和について考えるイベント「ピースフォーラムぎのわん」がサンエー宜野湾コンベンションシティで開催されました。ゆうりきやーのお二人が司会を務め、子どもエイサーや、長崎派遣生徒による報告、平和パネル展、平良こずえさんのステージ等が行われました。子どもからお年寄りまで、多くの方が来場し大いに盛り上がりました。



○平和パネル展
生徒の学習成果等を市役所1階ロビーにて12月18日～22日の間、展示しました。

派遣生徒報告



「戦争のない未来を創ろう」

普天間中学校 2年
仲村 琉希

私は8月8日から10日までの2泊3日の日程で、宜野湾市平和学習派遣事業に参加しました。平和学習に参加したいと思ったのは、72年前に私が生まれ育ってきたこの沖縄県で、全県民の4人に1人の命が奪われる悲惨な沖縄戦があり、同じ年に長崎県に原爆が落とされて赤ちゃんからお年寄りまで多くの人々が亡くなったことを知った時に、原子爆弾の恐ろしさについても学びたいと思い参加しました。

台風の影響もあって、1日遅れの出発となり福岡空港に到着したらすぐに、バスで長崎県へ向かいました。車内から外を眺めると、沖縄以上に緑が多くて街並みもとても綺麗にされていて72年前に戦争があり、原爆が落とされたとは想像もできないくらいでした。

私達は、長崎平和公園内のホールで開催されている、青少年ピースフォーラムに参加しました。まず驚いたことが、原爆が投下された体験者の内容でした。その方が14歳の時に農作業をしていた時に、自宅のある山の向こう側でピカッと光るのを見て、心配ですぐに帰る準備をしたそうです。いつも通っている道を進もうとしたら、駅周辺も全てが火の海になっていて、慌てて山を越えて自宅へ帰ったそうです。家族は原爆の影響を受けていて、最初にお母さんの死体を見つけて、妹の姿がないので生きていた弟と一緒に探しに行くつもりで死んでいたそうです。お母さんと妹の死に深く悲しみながらも、すぐにおばあちゃんの自宅へ逃げることができたそうですが、2ヶ月を過ぎた頃、弟の体に赤い斑点が増えてきて食事もできなくなりとうとう弟までも命を奪われることになりました。弟は、亡くなる前の日に「お兄ちゃんは死ぬなよ」と言われたので必死に生きてきたそうです。

大切な家族を一瞬にして失い、原爆投下を生きのびた後も放射能の影響で命を奪われるという想像していた以上の悲惨さに、話を聞いていてとても悲しくなり、戦争を風化させないようにしたいとより強く思うようになりました。またこの悲惨な出来事が今後日本や沖縄で起こってしまわないか、自分の大切な家族を思い出しながら、考えるだけで怖くなってしまいました。

先月、ニューヨーク国連本部での会議で、「核兵器禁止条約」が採択されたと聞いて嬉しく思いましたが、それに反対している北朝鮮のミサイル打ち上げや、オスプレイの海外での墜落や、世界中の様々な国で武器によって多くの子供達が犠牲になっているニュースなどを聞くたびに、沖縄の歴史資産となっている文化財を未来に残し、私達が安心して暮らせる平和な世界になってほしいと心から思えるようになりました。

派遣生徒報告



「未来が平和であるために」

普天間中学校 2年
桃原 嬉

千九百四十五年八月九日午前十一時二分、ピカッと桃色に光った空から、一発の原子爆弾が投下されました。それによって、長崎の街は一瞬で破壊され、死者七万三千八百八十四人、負傷者七万四千九百人という、大きな被害がもたらされました。私は、長崎に原爆が落とされてたくさんの方が亡くなったということは知っていましたが、およそ七万四千人の方が亡くなったということを知り、原爆の恐ろしさを改めて感じ、これから、もう一度こんなことがあったらと不安な気持ちになりました。

三日間にわたる平和学習では、青少年ピースフォーラムと原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参加しました。

特に、原爆犠牲者慰霊平和祈念式典では、ニュースで見て、こんな式があったんだ、これからは平和が続いてほしいな、という軽いことしか考えないで終わってしまっていました。けれど、今回、直接式典に参加することで、被爆者の遺族の方々と長崎県民の方々の核兵器廃絶実現への強い思いが伝わりました。

長崎市長の平和宣言では、「人はあまりにもつらく苦しい体験をしたとき、その記憶を封印し、語ろうとはしません。語るためには思い出さなければいけないからです。それでも被爆者が心と体の痛みを耐えながら体験を語ってくれるのは、人類の一員として、私たちの未来を守るために、懸命に伝えようとしているからです。」ということを知り、こんなに苦しい思いをしてまで、私達に原爆の悲惨さを伝えてくれる被爆者の方々の思いを、決して無駄にせず、一人でも多くの人に伝えようと決意することができました。

青少年ピースフォーラムでは、各県のいろいろな人と平和について考えることができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。そこで書いた、MY 平和宣言は、「努力をおこたらない、自分以外の人のことを、きちんと考えて行動する。」です。これを実践して、小さな力でも、私なりに世界を平和にする努力をしていこうと決意しました。

私達の住んでいる沖縄県の上空でも、毎日、アメリカの飛行機が飛んでいます。そして、ここ、宜野湾市には、普天間飛行場があり、毎日危険な状態で、私達は学校で勉強に励んだり、部活に励んだりしています。これは、普通ではありません。私達は、この危険な状況にもっと危機感を持つべきです。私は、これまでより、一層普天間飛行場の危険性に対する考え方を強めることを、今回の学習を通して決意しました。

戦争体験者のいる時代も、そろそろ終わりに近づき、平和を願う気持ちも、年々薄れているように感じます。だから、私は、これからも世界が平和であるために、今回学んだことを、多くの人に伝えていこうと思います。

未来が平和であるために、私ができることを、精一杯がんばります。

派遣生徒報告



「願いをつなぐ」

真志喜中学校 1年
玉城 珠里

私は八月八日から三日間、長崎平和学習派遣事業で市中学生代表として長崎へ行きました。長崎に落とされた原子爆弾のことや平和について考え、知ることができました。

長崎についた一日目は、青少年ピースフォーラムに参加し、被爆者の話やグループにわかれての意見交換会や紙芝居、原爆資料館周辺を周ったりしました。私は被爆者の深掘讓治さんの話を聞いて原爆での被害や原爆が落ちたときのバンという音がしたという話を聴き、考えただけでもゾッと、恐怖を感じました。また、嘉代子桜の紙芝居をきき、私は「桜を植えて亡くなった娘と同じ女学生のとむらいをする。」という母親の言葉が心に焼き付き、原爆が二度と起きないことを祈りました。

二日目は、午前中に平和祈念式典に参加しました。私は平和祈念式典の被爆者合唱をきき、平和の大切さを感じました。また、午後のピースフォーラムでは前日の続きをし、核兵器を持っている国がたくさんあることに驚き、核兵器のない世の中が一日でも早く来てほしいと思いました。

三日目は、福岡県にある九州国立博物館や大宰府天満宮へ行きました。

私はこの三日間を通して、長崎の人々の願いや祈りを目や耳で感じ、原爆の恐ろしさを学びました。そして、平和の重みを知り、平和で核兵器のない未来のために今私達ができることはなにかを考えさせられました。

今私達にできることは、長崎で学び感じたことを身近な人に伝えること、長崎でおこったことを決して忘れないこと、思いやりの心を持つ自分自身の心の強さを持つことです。この事を自分の後の世代の人々につなぐこと。それが今私達のやるべきことだと思います。

平和で核兵器のない未来が来ることを願って。

派遣生徒報告



「平和学習に行って」

嘉数中学校 1年
佐久田 彪雅

平和学習に行っているいろいろなことを学びました。

ピースフォーラムで、被爆者の体験談を聞きました。原爆は地上から500m上で被爆しました。人によってはちがうが、爆発した時、空が全てピンク色に光った。その時一気に爆風が来たそうです。何もかもが爆風で飛ばされ、何が起きたのか分からずうずくまりました。起き上がるとそこは灰しか無かった。空を見ると真っ赤だった。帰っていいという命令を聞き、家にむかおうとしたが家に行っているとき「あっちがわは火の海だから」と言われ行けなかった。次の日お母さんを探しに行くと、あ！と思った。お母さんの死体があった。涙もでなかった。その後弟も来た。もう一人弟がいて、妹もいる。そのうち一人の弟と妹は亡くなった。弟は、体が弱っていき、黒い点々がでてきた。弟は熱いと言っているがさわっても何も熱くない。そのうち弟は、兄さんは死ぬなよ！と言って亡くなった。

このように一発の原爆でとうとい命は奪われていった。今この世に核爆弾は2万もの核爆弾が存在する。原爆の中心地の温度は250万度とひじょうに高い温度なのです。このように原爆はとても高温なのです。その後は、放射能のきょうふです。黒い雨が降り人々を苦しめるのです。

原爆資料館では、写真や原爆のもけいなどがありました。熱風でひんがたれ下がった写真、被爆した後の風景などがありました。とても恐ろしかったです。

これからはもっと平和のことを考えていきたいです。

派遣生徒報告



「平和の大切さ」

嘉数中学校 1年
濱川 明珠

わたしは、平和の大切さ、原爆の被害、沖縄戦との違い、長崎の文化などを知りたくて、この平和学習派遣事業に参加しました。

長崎では、平和祈念式典に参加して、私は長崎市長さんの「長崎平和宣言」を聞いて、とても心に響いたところがありました。「人はあまりにもつらく苦しい体験をしたとき、その記憶を封印し、語ろうとはしません。語るためには思い出さなければならないからです。それでも被爆者が心と体の痛みを耐えながら体験を語ってくれるのは人類の一員として、私たちの未来を守るために懸命に伝えようと決意しているからです。」という言葉です。私はこの言葉を聞いたときに、「被爆者が伝えようとしていることをまた、自分達が伝えていかなければならないな」と思いました。

しかし、世界には約一万五千三百五十発もの核兵器があります。それでも、少しずつ少なくなりつつあります。自分の国の安全を保とうとする考え方から、世界から核兵器はなくならないのです。

八月九日の十一時二分、あの瞬間で7万人あまりもの尊い命が奪われたのです。さっきまで遊んでいた子供達、勉強をしていた子供達、家事をしていたお母さん、仕事をしていたお父さんもみんな亡くなってしまったのです。建物に埋もれて亡くなった人など、たくさんの命が一瞬にして消えてしまいました。全身にヤケドを負いながら家族を探し、さ迷い歩く人もたくさんいたそうです。もう二度と同じ誤ちを繰り返してはなりません。ピースフォーラムでは、他府県の人達との意見交換をし、沖縄の言葉や文化についても話すことができました。みんな世界平和を願う気持ちは一緒でした。

私はこの3日間で、平和の大切さがあらためて大事だなと思いました。今回学んだ事を活かし、次の世代に繋げ、世界中で笑顔がふえるように頑張ります。

派遣生徒報告



「戦争 原爆」

宜野湾中学校 1年
池宮城 樹一郎

ぼくは、長崎と沖縄で戦争や原爆のことを学習して、三つの事を学びました。

まず、戦争がどれだけ、悲しかったり、つらかった事なのか学びました。戦争をすることで、たくさんの方が死んでいき、戦争が終わっても、家がなくなっているの、住む家もなく、食料も少なく、戦後も苦しい生活を送っていることがわかり、とても悲しく思いました。また、沖縄戦で、たくさんの犠牲者が、出ている中、長崎、広島で、原爆が落とされ、一瞬で、死者が七万三千八百八十四人、負傷者が、七万四千九百九人という、とても、多くの方が、犠牲になりました。実際に、戦争を体験した人から戦争の話聞いて、こういう事が、本当に起っていたんだと、とても、恐ろしかったです。

次に、命がどれだけ大切かを学びました。七十二年前の戦争で、お年寄りから、生まれたての赤ちゃんまで、次々に大切な命が亡くなっていくのを、写真で見たり、聞いたりして、とても悲しく思いました。沖縄には「命どう宝」という言葉がありますが、本当に一番大切な物だと思いました。そしてぼくもいつ自分が死ぬか、分からないので、一日一日を大切に過ごしていきたいと思えます。

次にぼくが、平和学習で学んだ事は、平和がどれだけ大切かという事です。今、何とも感じていない生活でも、戦争中は、いつ爆弾が落ちてくるかも分からないし、いつ殺されるか、分からない。毎日毎におどおどしている生活だった事が、かわいそうだと思えました。ぼくは、平和な時代に生まれてとても幸運だと思えました。ぼくは、今元気に過ごしていることが嬉しく思えます。これからもこの平和が続くといいなと思っています。

最後に、戦争や原爆の事を学んで、ぼくが思った事は、戦争は、やっぱりしてはいけないもので大切な命は、自分でしっかり大切にしたいと思えました。実際に、戦争や原爆を体験した人から話を聞けるだけでとてもすごいと思えました。ぼくは、次の世代に、命の大切さ、そして戦争がどれだけつらかったかを教えたいです。これからもひさんな戦争があった事を忘れず、平和の大切さや命の尊さを発信していきたいと思えます。

派遣生徒報告



「平和学習を終えて、、、」

宜野湾中学校 1年
屋良 明佳里

私は八月八日から八月十日までの三日間、長崎で原爆のことや戦争について学びました。長崎では、青少年ピースフォーラムで長崎の原爆について意見を交換したり被爆遺構巡りをしました。その中でも私が一番心に残ったのは、被爆体験者の深堀譲治さんのお話でした。深堀さんの話は家族などの話で、もし助かったとしても、その後に放射能の影響で亡くなってしまう人も大勢いたとつらそうに話していたので、聞いている私もつらくなりました。でも、とても勉強になりました。

二日目は路面電車に乗って平和式典に参列しました。被爆者の合唱や長崎平和宣言、平和への誓いなどを聴きました。私が平和式典に参加して心に残っているのは、長崎平和宣言と平和への誓いです。平和宣言では、核兵器禁止の事について強く訴えていたからです。もう一つの平和への誓いは、核兵器の恐ろしさが訴えられていたので、それがとても心に残りました。他にも原爆資料館にも行きました。そこでは、長崎に落とされた「ファットマン」の模型や原爆が落とされた時刻十一時二分で止まった時計、壊れた建物や傷ついた人々など残酷な写真も展示されていました。私はその展示を見てとても怖く恐ろしいと思いました。

三日目は大宰府天満宮などに行ってお参りをしました。

私はこの三日間で、戦争のおろかさや核兵器の恐ろしさなどを学びました。地上戦だった沖縄戦もひさんでしたが、沖縄戦とは違った形で、大勢の人が一瞬にして亡くなってしまいう核兵器はとてもひどい兵器だったということを改めて感じました。

私はこのように平和派遣事業という機会をもらい、いろいろなことを学ぶことができました。そこで学んだ事をたくさんの人に話していきたいです。そのためにまずは、身近な家族や友達に沖縄戦がどんな戦争だったか、核兵器の恐ろしさや展示されていた内容を自分なりに伝えていきたいです。そして平和を守るために自分ができそうなことを頑張っていきたいと思います。

実施要綱

宜野湾市平和学習派遣事業実施要綱

宜野湾市平和学習派遣事業実施要綱

(目的)

第1条 この要綱は、市の平和行政の推進を目的とする宜野湾市平和市民啓発事業の実施により市内生徒を原爆被爆地に派遣し、平和に関する学習、交流等を通して平和の尊さを学び平和思想に対する啓発を高めるために、市内生徒のなかから派遣される生徒(以下「派遣生徒」という。)を選抜すると共に、その役割及び平和学習派遣事業実施等に関する基本的な事項を定めることを目的とする。

(派遣生徒の選抜)

第2条 派遣生徒は、思想、信条、宗教の如何を問わず広く平和を愛する市内生徒のなかから以下の要領で選抜する。

- (1) 派遣生徒は市内各中学校区から2名選抜し、定数は8名以内とする。
- (2) 派遣生徒の対象学年は中学校全学年とし、選抜方法については各学校長に一任する。
- (3) 派遣生徒は各中学校長名での推薦書(様式第1号)及び保護者の派遣同意書(様式第2号)を市長に提出し審査後、市長が派遣を決定する。
- (4) 派遣が決定した後に、派遣生徒本人からの辞退申し出があった場合はさらに同一中学校区より補充し、決定する。

(役割)

第3条 派遣生徒は、日本国憲法の理念を大切にし、戦争のない社会、ひとりひとりの生命を限りなく大切にする人間尊重の社会を創り、それを発展させるための平和交流及び日常的に生活の中で平和について積極的な活動を行うことを役割とする。

(平和学習への派遣)

第4条 派遣生徒は、市の計画する以下の内容の平和学習派遣事業に参加し、平和への認識を深める研修・交流活動を行うものとする。

- (1) 平和学習派遣は8月に実施し、派遣先は広島市、長崎市のどちらかを市が決定する。
- (2) 派遣期間は原則として4日以内とする。

(3) 派遣生徒は市の計画する事前学習に積極的に参加するものとする。

(費用負担)

第5条 平和学習派遣に係る費用負担については以下のとおりとする。

- (1) 派遣に関する費用(実費)については、旅費・交通費、宿泊費、食卓費、旅行保険費用については市の負担とする。但し、事前学習の交通費については派遣生徒の負担とする。
- (2) 平和学習に関する費用(実費)については、参加料、講師料、施設入館料については市の負担とする。
- (3) 事前研修及び派遣期間中に派遣生徒の責任により生じた経費及び疾病などによる経費は派遣生徒の負担とする。

(随行員)

第6条 派遣期間中においては、下記のいずれかの職員が派遣生徒を随行するものとする。

- (1) 教育委員会職員
- (2) 中学校教員
- (3) 事務局職員

(派遣後の報告書の提出)

第7条 派遣生徒は、派遣事業終了後、以下の内容で報告書を提出しなければならない。

- (1) 派遣生徒は派遣事業終了後1ヶ月以内に市長へ報告書を提出する。
- (2) 前号で定める報告書は、400字詰め原稿用紙2枚以上とする。

(事務局)

第8条 本事業の事務局を平和行政担当課に置く。

附 則(平成17年6月8日決裁)

附 則(平成24年4月12日決裁)

この要綱は決裁の日から施行する。

世界平和を希求する 反核軍縮平和宣言都市



平和都市宣言

我々宜野湾市民は、第二次大戦の悲痛な教訓を生かし、反核、軍縮を求める平和都市として次のとおり宣言する。

- 我が国は、非核三原則を国是としており、今後ともその基本理念である反核を全国民が連帯して推進しなければならない。
- 宜野湾市民は、宜野湾市を永久に反核、軍縮を求める平和都市とすることを決意し、人類の滅亡につながる核兵器の廃絶と軍備の縮小を核保有国に強く求める。
- 我が宜野湾市民は、子孫の繁栄を願い、世界平和を希求する諸国民と連帯して、米ソ両国に反核、軍縮を強く求め、恒久平和を築くため、全力を尽くすことを誓う。

1985年（昭和60年）3月18日
宜野湾市

資料提供 長崎市 被爆継承課

発行 宜野湾市
市民協働推進課 平和・男女共同係
〒901-2710 沖縄県宜野湾市野嵩 1-1-1
TEL 098-893-4411 FAX 098-892-7022
HP <http://www.city.ginowan.okinawa.jp>